



「おにぎりの力」

前橋市立第一中学校 1年 清水 真依

「わあー、おいしい。何だかほっとする。」

私にはアメリカに住んでいる従姉がいる。一年に一回、夏休みにしか会う事が出来ない従姉だ。この言葉は、今年の夏休みに空港から夜遅く私の家に着いて、私の母が用意しておいたおにぎりを食べた時、その従姉が言った言葉だ。十何時間もかけて日本に来る。長旅と時差でとても疲れた様子だった。お腹がすいていたとは言え、おにぎりを口にした瞬間、表情がばあーっと明るくなり、頬が紅くなった。何だかとてもないエネルギーが体に入ったような瞬間だった。従姉の嬉しそうな表情と穏やかな顔が私の頭にずっと焼きついている。私もまた、嬉しくなったのをよく覚えている。

「母のおにぎり」。私には当たり前のお米であり、忙しい日々の中で口にすることは非常に多く、正直私にとっては飽き飽きしたメニューの一つだ。しかしアメリカから来た従姉がおにぎりを食べる様子を見てから、私はこのおにぎりが不思議な力を持ったすごい物なのではないかと思うようになった。おにぎりを通してその先にもっと深い何かを学べるような気持ちになりワクワクした。お米でできたおにぎり。真ん中には鮭や昆布など好きな具を入れて塩をふってのりで巻く。誰にでも簡単に出来そうだ。昔から日本の伝統として受け継がれ、みんなに愛されているスーパーフードだ。また、日本にはおにぎりの材料となるおいしいお米がたくさん作られている。私の家の近くにも夏は一面緑色、そして秋には稲刈りを待つ秋色に染まる田んぼがたくさんある。農家の方々が、苗を育て、田おこしをし、田植えをし、思いが込められた稲が育ち、一生懸命稲刈りをして、やがて大切なお米として私達の家にやって来る。一つ一つの作業においしいお米を育てるための思いが込められていると思うと、一粒一粒を大事に味わおうという気持ちになる。従姉が、「おにぎり」を食べる姿から日常であまり考えた事がなかったお米の大切さや有難さも考えさせられる機会を得ることができた。

私は日本で生まれ、毎日当たり前のようにお米を主食として育ち今日までの日々を送ってきた。しかし、海外で生活する従姉の話では、日本で食べるお米は別格であり、食べると気持ちがほっとして、穏やかになるらしい。私は中学生になり、生活がだいぶ変化した。勉強や部活で忙しい毎日を送り、一日はあっという間に過ぎて行く。日々やるべき事を必死にこなしているのが現実だ。そして、忙しい時にこそおにぎりを食べていた事に気がついた。私の好きな具が入っている母の思いが込められたおにぎり。感謝の気持ちを持って一口一口食べたいと思う。手の平におさまる程のこの小さなおにぎりはお米を作った方々の思い、それを炊いて思いを込めて握った人の思い、様々な愛情が込められている。さらにお米のおいしさ、大切さを世界中の人々に知ってもらいたい。そう強く思うようになった。

来年の夏、日本で東京オリンピックが開催される。おそらく多くの外国人が日本を訪れるだろう。日本のおいしいおにぎり、お米をたくさんの人々に食べてもらいたい。日本の良さを多くの人々に知ってもらいたい。今からそれが楽しみだ。それまでに、私自身も様々な面から日本を勉強したい。

令和という新しい時代となった。私はこれからも日本の伝統を守り、引き継いでいける大人になるために毎日全力で生きていきたい。たった一つのおにぎりから色々考えさせられた。二週間の滞在を終え、帰国する従姉に私は一握り一握り精一杯の思いを込めておにぎりを作って渡した。飛行機の中で、そのおにぎりを食べる従姉の姿を思い浮かべたら自然と笑顔になった。